

中国怪奇小説集

稽神録

岡本綺堂

青空文庫

第七の女は語る。

「五代を過ぎて宋そうに入りますと、まず第一に『太平広記』五百卷という大物がございます。但しこれは宋の太宗たいそうの命によつて、一種の政府事業として李昉りぼうらが監修のもとに作られたもので、汎ひろく古今の小説伝奇類を蒐集したのでありますから、これを創作と認めるわけには参りません。そこで、わたくしは自分の担任として『稽神録』について少々お話をいたしたいと存じます。『稽神録』の作者は徐鉉じよげんであります。徐鉉は五代の当時、南唐に仕えて金陵きんりやうに居りましたが、南唐が宋に併合されると共に、彼も宋朝に仕うる人となつて、かの『太平広記』編集者の一人にも加えられて居ります。兄弟ともに有名の学者で、兄の徐鉉を大徐、弟の徐鍇じよかいを小徐と言ひ伝えているそうでございます。女のくせに、知つたか振りをいたすのは恐れ入りますから、前置きはこのくらいにして、すぐに本文ほんもんに取りかかることに致します」

廬山の廟

庚寅こういんの年、江西の節度使の徐知諫じよちかんという人が錢百万ぜんにをもつて廬山使者の廟びようを修繕することになりました。そこで、潯陽しんようの県令が一人の役人をつかわして万事を取扱わせると、その役人は城中へはいつて、一人の画工を召出して、自分と一緒に連れて行きました。画工は画えの具その他をたずさえて、役人に伴われて行きますと、どういうわけか、城の門を出る頃からその役人はただ昏々こんこんとして酔えるが如きありさまで、自分の腰帯をはずして地に投げ付けたりするのです。

「この人は酔っているのだな」と、画工は思いました。

そこで忤さからわずに付いてゆくと、役人はやがてまた、着物をぬぎ、帽子をぬぐという始末で、山へ登る頃にはほとんど赤裸あかはだかになってしまいました。そうして、廟に近い溪たにが川のほとりまで登って来ますと、一人の卒そつが出て参りました。卒は青い着物をきて、白い皮で膝を蔽っていました。つかつかと寄つて来て、かの役人を捕えるのです。

「この人は酔っているのですから、どうぞ御勘弁を……」

こう言つて、画工が取りなすと、卒は怒つて叱り付けました。

「おまえ達に何がわかるか。黙っている」

卒は遂に彼を捕虜とりこにして、川のなかに坐らせました。その様子が唯ただの人らしくないと思

つたので、画工は走って廟中の人びとに訴えると、大勢が出て来ました。見ると、卒の姿はいつか消え失せて、役人だけが水のなかに坐っているのです。声をかけても返事がないので、更によく見ると、彼はもう死んでいるのでした。あとになって帳簿を調べてみると、彼は修繕の錢百万の半分以上を着服ちやくふくしていることが判りました。

夢に火を吹く

張易ちようえきという人が洛陽にいた時に、劉りゆうながしと懇意になりました。劉は仕官もせず、に暮らしている男でしたが、すこぶる奇術を善くするのでした。

ある時、劉が町の人に銀を売ると、その人は満足に値あたいを支払わないのです。そこで、劉は張と連れ立ってその催促にゆくと、彼はそれを素直に支払わないばかりか、種々の難癖なんへくをつけて逆捻さかねじに劉を罵りました。劉は黙ってそのまま帰って来ましたが、あとで張に話しました。

「彼は愚人で道理を識らないから、私がすこしく懲らしてやります。さもないと、土地の神霊のために重い罰を受けるようになりますから、彼を懲らすのは彼を救うがためです」

どんな事をするのかと見てみると、劉はその晩、燈火あかりを消した後、自分の寢床の前に炭火をさかんにおこして、なにか一種の薬を焼きました。張は寝た振りをして窺っていると、暗いなかに一人の男があらわれて、頻しきりにその火を吹いています。よく見ると、それはかの町の人でありました。彼は夜の明けるまで火を吹きつづけて、その姿はいつか消え失せてしまいました。

その後に、張が町の人の家をたずねると、彼はひどく弱っていました。

「どうも不思議な目に逢いました。このあいだの晩、夢のうちに誰かが来てわたくしを何処へか連れて行って、夜通し火を吹かせられました。しまいには息が続かなくなつて、実に弱り果てました。その夢が醒めると、火を吹いていた口唇くちびるがひどく腫はれあがつて、なんだか息が切れて、十日とおかばかりは苦しみました」

それを聞いて、張はいよいよ不思議に思いました。

劉はこういう奇術を知っているために、河南の尹いんを勤めている張全義ちようぜんぎという人に尊敬されていましたが、あるとき張全義が梁りやうの太祖たいそと一緒に食事をしている際に、太祖は魚なますが食ないたと言いい出しました。

「よろしゅうございます」と、張全義は答えました。「わたくしの所へまいる者に申し付

ければ、すぐに御前へ供えられます」

すぐに劉を呼び寄せると、劉は小さい穴を掘らせ、それにいっぱいの水を湛たえさせて、しばらく釣竿を垂れているうちに、五、六尾の魚をそれからそれへと釣りあげました。その不思議に驚くよりも、太祖は大いに怒りました。

「こいつ、妖術をもつて人を惑わす奴だ」

背を打たせること二十杖じょうの後、首枷くびかせ手枷てかせをかけて獄屋につながせ、明日かれを殺すことにしていると、その夜のうちに劉は消えるように逃げ去って、誰もそのゆくえを知ることが出来ませんでした。

桃林の地妖

閩みんの王審知おうしんちはかつて泉州せんの刺史しし（州の長官）でありましたが、州の北にある桃林とうりんという村に、唐末の光啓こうけい年中、一種の不思議が起りました。

ある夜、一村の土地が激しく震動して、地下で数百の太鼓を鳴らすような響きがきこえましたが、明るる朝になると、田の稲は一本もないのです。試みに土をほり返すと、

その稲はみな地中に逆さまに生えていました。

その年、審知は兄の王潮と共に乱を起して晋安に勝ち、ことごとく歐閩の地を占有して、みずから閩王と称することになりました。それから伝うること六十年、延義という人の代に至つて、かの桃林の村にむかしの地妖が再び繰り返されました。やはり一村の地下に怪しい太鼓の音がきこえたのです。但しその時はもう刈り入れが終つたのちで、稲の根だけが残つていたのですが、土を掘つてみると、それが前と同じように、みな地中に逆さまに立つていました。

その年、延義は家来のために殺されて、王氏は滅亡しました。

怪青年

軍吏の徐彦成は材木をかうのを一つの商売にしています、丁亥の年、信州の口場へ材木を買いに行きましたが、思うような買物が見当らないので、暫くそこに舟がかりをしていると、ある日の夕暮れ、ひとりの青年が二人の僕をつれて、岸のあたりを人待ち顔に徘徊しているのを見ましたので、徐は声をかけてその三人を舟へ呼び込み、有

り合わせの酒や肴を馳走すると、青年はひどく気の毒がっているようでしたが、帰るときに徐に言いました。

「わたしはここから五、六里のところにある別荘に住んでいる者です。明日一度お遊びにお出で下さいませんか」

「ありがとうございます」

あくる日、約束の通りにたずねて行くと、一里ばかりのところの者が来ていました。馬に乗せられ、案内されると、やがて大きい邸宅の前に着きました。かの青年も出で迎えて、いろいろの馳走をしてくれた末に、徐が材木を仕入れに来ていることを聞いて、青年は言いました。

「それならば私の持つている山に材木がたくさんありますから、早速に伐り出させましょう」

舟へ帰って待つっていると、果たして一兩日の後にたくさんの材木を運ばせて来ました。しかも木地が良くて、値が廉いので、徐は大喜びで取引をしました。

それでもうこの土地にいる必要もないので、徐はさらに暇乞いに行きますと、青年はまた四枚の大きい杉の板を出しました。

「これは売り買いではなく、わたしからお餞^{せんべつ}別に差し上げるのです。呉^ごの地方へお持ちになると、きっと良い御商法になりましたよ」

そこで、呉の地方へ舟を廻しますと、あたかも呉の帥^{そう}が死んで、その棺にする杉の板が入用だということになったのですが、その土地にはよい板がない。そこへかの杉を売り込みに行ったので、たちまち買い上げられることになって、一度に数十万銭を儲けました。

徐もその謝礼として、種々の珍しい物を買ひ込んで、再びかの青年のところへ持参すると、青年もよろこんで再び材木を売ってくれました。

その後にもまた二、三度往復して、徐は大金儲けをしました。それから一年ほど間を置いて訪ねてゆくと、もう其の家は見えませんでした。

あんな大きい邸宅がどこへ移転したのかと、近所の里の人びとに聞き合わせると、初めからそんな家のあったことさえも知らないというのでした。

鬼国

梁^{りょう}の時、青州^{せい}の商人が海上で暴風に出逢つて、どことも知れない国へ漂着しました。遠

方からみると、それは普通の嶋などではなく、山や川や城もあるらしいのです。

「どこだろう」

「そうですねえ」と、船頭も考えていました。「わたし達も多年の商売で、方々へ吹き流されたこともあります、こんな処へは一度も流れ着いたことはありません。なんでもこちらの方角に鬼国きこくというのがあると聞いていますから、あるいはそれかも知れません」

なにしろ訪ねてみようというので、人びとが上陸すると、家の作りや田畑のさまは中国とちつとも変りません。ただ変っているのは、途中で逢う人びとに会え釈しゃくしても、相手はみな知らない顔をして行き過ぎてしまうのです。むこうの姿はこちらに見えても、こちらの姿はむこうに見えないらしいのです。

やがて城門の前に行き着くと、そこには門を守る人が立っているのです、こちらでは試みに会釈すると、かれらはやはり知らない顔をしているのです。そこで、構わずに城内へはいり込んでゆくと、建物もなかなか宏壮で、そこらを往来している人物もみな立派にみえますが、どの人もやはりこちらを見向きもしないので、ますます奥深く進んでゆくと、その王宮では今や饗宴の最中らしく、大勢の家来らしい者が列坐している。その服装も器具も音楽もみな中国と大差がないのでした。

咎める者が無いのを幸いに、人びとは王座のそばまで進み寄ってうかがうと、王は俄かに病いにかかったという騒ぎです。そこで巫女みこらしい者呼び出して占わせると、かれはこう言いました。

「これは陽地の人が来たので、その陽気に触れて、王は俄かに発病されたのでござります。しかしその人びとも偶然にここへ来合わせたので、別に祟りたたをなすというわけでもござりませんから、食い物や乗り物をあたえて還かえしてやったらよろしゅうござりましょう」

すぐに酒や料理を別室に用意させたので、人びとはそこへ行つて飲んだり食つたりしていると、巫女をはじめ他の家来らも来て何か祈っているようでした。そのうちに馬の用意も出来たので、人びとはその馬に乗つて元の岸へ戻つて来ましたが、初めから終りまで向うの人たちにはこちらの姿が見えなかつたらしいということでした。

これは作り話でなく、青州の節度使賀徳がとくけん、魏博の節度使楊厚ようこうなどという偉い人びとが、その商あきんど人の口から直接に聴いたのだと申します。

蛇喰い

安陸あんりくの毛もうという男は毒蛇を食いました。食うといつても、酒と一緒に呑むのだそうですが、なにしろ変った人間で、蛇食い又は蛇使いの大だい道どう芸人となつて諸国を渡りあるいた末に、予章よしょうという所に足をとどめて、やはり蛇を使いながら十年あまりも暮らしてました。

すると、ここに薪たきぎを売る者がありまして、鄱陽はんようから薪を船に積んで来て、黄培山こうばいさんの下に泊まりますと、その夜の夢にひとりの老人があらわれて、わたしが頼むから、一匹の蛇を江西の毛もうという蛇使いの男のところへ届けてくれと言いました。そこで、その人は予章へ行つて、毛のありかを探しているうちに、持つて来た薪も大抵は売り尽くしてしまいました。

そのときに一匹の蒼白い蛇が船舷ふなぞこにわだかまっているのを初めて発見しましたが、蛇は人を見てもおとなしくとぐろを巻いたままで逃げようとしません。さてはこの蛇だないと気がついて、それを持つて岸へあがりますと、ようように毛という男の居どころが判りました。

毛はその蛇を受取つて引き伸ばそうとすると、蛇はたちまちに彼の指を強く噛みましたので、毛はあつと叫んで倒れましたが、それぎりて遂に死んでしまいました。そうして、

その死骸は間もなく腐つて頽くずれました。

蛇はどこへ行つたか、そのゆくえは知れなかつたそうです。

地下の亀

李宗りそうが楚州の刺史しし（州の長官）となつてゐる時、その郡ちゆうにひとりの尼がありました、ある日、町なかをあるいてゐると、たちまち大地に坐つたままで動かなくなりました。おまけに幾日も飲まず食わずにゐるのです。

その訴えを聞いて、李は武士らに言い付けて無理にその尼のからだを引き起して、試みにその坐つていた地の下をほり返してみると、長さ五、六尺の大きい亀があらわれました。亀は生きてゐるので、川へ放してやりました。

尼はその後、別条もありませんでした。

劍

建州けんしゅうの梨山廟りざんびょうというのは、もとの宰相李廻りかいを祀まつつたのだと伝えられています。李は左遷されて建州の刺史となつて、臨川りんせんに終りましたが、その死んだ夜に、建安けんあんの人たちは彼が白馬に乗つて梨山に入ったという夢をみたので、そこに廟を建てることになつただそうです。

呉ごという大將が兵を率いて晋安しんあんに攻め向うことになりました。呉は新しく鑄いらせた劍を持つていまして、それが甚だよく切れるのです。彼は出陣の節に、その劍をたずさえて梨山の廟に参詣しました。

「どうぞこの劍で、手ずから十人の敵を斬り殺させていただきとうございます」と、彼は神前に祈りました。

その夜の夢に、神のお告げがありました。

「人は悪い願いをかけるものではない。しかし私はおまえを祐たすけて、お前が人手にかからないように救つてやるぞ」

いよいよ合戦になると、呉の軍は大いに敗れて、左右にいる者もみな散りぢりになりました。敵は隙間なく追いつめて来ます。

とても逃げおおせることは出来ないど覚悟して、呉はかの劍をもつてみずから首を刎はね

て死にました。

金児と銀女

建安の村に住んでいる者が、常に一人の小さい奴しもべを城中の市いちへ使いに出していました。家の南に大きい古塚がありまして、城へ行くにはここを通らなければなりません。奴がそこを通るたびに、黄いろい着物をきた少年が出て来て、相撲を一番取ろうというのです。こつちも年が若いものですから、喜んでその相手になって、毎日のように相撲を取っていました。それがために往復の時間が毎日おくれるので、主人が怪しんで叱りますと、奴も正直にその次第を白状しました。

「よし。それではおれが一緒にゆく」

主人は槌つちを持って草のなかに忍んでいると、果たしてかの少年が出て来て、奴に相撲をいどむのです。主人が不意に飛び出して打ち据えると、少年のすがたは忽ちに金で作った小児に変わりました。それを持って帰ったので、主人の家は金持になりました。

又一つ、それに似た話があります。

廬州の軍吏蔡彦卿さいげんけいという人が拓阜たくこうというところの鎮将となっていました。ある夏の夜、鎮門の外に出て涼んでいると、路の南の桑林のなかに、白い着物をきた一人の女が舞っているのを見ました。不思議に思つて近寄ると、女のすがたは消えてしまいました。あくる夜、蔡は杖を持ち出して、その桑林の草むらに潜んでいると、やがてかの女があらわれて、ゆうべと同じように舞い始めたので、彼は飛びかかつて打ちたお仆すと、女は一枚の白金に変わりました。さらにその辺の土を掘り返すと、数千両の銀が発見されました。

海神

江南の朱廷禹しゅていいうという人の親戚なにかしが海を渡るときに難風に逢いまして、舟がもうくつがえりそうになりました。

「それは海の神が何か欲しがっているのですから、ためしに荷物を捨ててごらんなさい」と、船頭が言いました。

そこで、舟に積んでいる荷物を片端から海へ投げ込みましたが、波風はなかなか鎮まりそうもありません。そのうちに一人の女が舟に乗つて来ました。女は絶世の美人で、黄い

ろい衣きものを着て、四人の従卒に舟を漕がせていましたが、その卒はみな青い服を着て、朱い髪を散らして、豕いのこのような牙きばをむき出して、はなはだ怖ろしい形ぎようそつ相そうの者どもばかりでした。

女はこちらの舟へはいつて来て言いました。

「この舟にはいい髻かもしがある筈だから、見せてもらいたい」

こちらは慌てているので、髻などはどうしたか忘れてしまつて、舟にあるだけの物はみな捨てましたと答えると、女は頭かしらをふりました。

「いや、舟のうしろの壁ぎわに掛けてある箱のなかに入れてある筈だ」

探してみると、果たしてその通りでした。舟には食料の乾ほしく肉にくが貯えてありましたので、女はそれを取つて従卒らに食わせましたが、かれらの手はみな鳥の爪のように見えました。女は髻を取つて元の舟へ乗り移ると、人も舟もやがて波間に隠れてしまいました。波も風もいつか鎮まつて、舟は安らかに目的地の岸へ着きました。

東州、せいかい 海軍の姚氏ちようしがその部下と共に、海の魚を捕つて年々の貢物みつぎものにしていました。

ある時、日もやがて暮れかかるのに、一向に魚が捕れないので、困つたものだと思つて
いると、たちまち網にかかった物がありました。それは一個の真つ黒な人間で、からだじ
ゆうに長い毛が生えていまして、手をこまぬいて突つ立っているのです。おまえは何者だ
と訊いても、返事をしません。

「これは海人かいじんというものです」と、漁師は言いました。「これが出ると必ず災いがあり
ます。何かの事のないように、いつそ殺してしまひましょう」

「いや、これは神霊の物だ。みだりに殺すのは不吉である」

姚は彼をゆるして、祈りました。

「お前がわたしのためにたくさんの魚をあたえて、職務を怠るの罪を免かれるようにして
くれれば、まことに神といふべきである」

毛だらけの黒い人間は、退いて水の上をゆくこと数十歩で沈んでしまいました。その明
くる日からは例年に倍ばいする大漁でした。

怪獸

李遇りくうが宣武せんぶの節度使となつてゐる時、その軍政は大将の朱從本しゅじゅうほんにまかせて置きました。朱の家には猴さるを飼つてありましたが、厩うまやの者が夜なかに起きて馬まに秣まぐさをやりに行く、そこに異物を見ました。

それは驢馬ろばのような物で、黒い毛が生えていました。しかも手足は人間のようで、大地に坐つてかの猴を食つてゐるのでした。人の来たのを見て、かれは猴を捨てましたが、もう半分ほどは食われていました。

その明くる年、李遇の一族は誅せられました。故老の話によると、郡中にはこの怪物が居りまして、軍部に何か異変のあるたびに、かれは姿をあらわします。それが出ると、城中いっばいに忌いやな臭いいがするそうです。反乱を起した田※でんいんが敗れようとする時にも、かの怪物が街なかにあらわれて、夜警の者はそれを見つけましたが、恐れて近寄りませんでした。果たして一年を過ぎないうちに、田は敗れました。

四足の蛇

舒州じょしゅうの人が山にはいつて大蛇を見たので、直ぐにそれを撃ち殺しました。よく見ると、その蛇には足があるので、不思議に思つて背負つて帰ると、途中で県の役人五、六人に逢いました。

「わたしは今この蛇を殺しましたが、蛇には四つの足があるのです」
 そう言われても、役人たちには蛇の形が見えないのです。

「その蛇はどこにいるのだ」

「いるではありませんか。これが見えないのですか」

その人は蛇を地面に投げ出すと、役人たちは初めて蛇の形を見ました。その代りに、今度は蛇を見るばかりで、その人の形が見えなくなりました。なにかの怪物に相違ないといふので、蛇はそのまま捨てて帰つたそうです。この蛇は生きているあいだに自分の形を隠すことが出来ず、死んでから人の形を隠すといふのは、その理屈が判らないと著者も言つています。

天祐丙子てんゆうひのえねの年、浙西せつせいの軍士周交しゅうこうが乱をおこして、大将の秦進忠しんしんちゆうをはじめ、張胤ちやういんら十数人を殺しました。

秦進忠は若い時、なにかの事で立腹して、小さい奴しもべを殺しました。刃やいばをその心むねに突き透したのです。その死骸は埋めてしまつて年を経たのですが、末年になつてかの小奴しょうどがむねを抱えて立つている姿を見るようになりました。初めは百歩を隔てていましたが、後にはだんだんに近寄つて来ました。

乱のおこる日も、いま家を出ようとする時、馬の前に小奴が立っているのを、左右の人もみな見ました。役所へ出ると右の騒動で、彼は乱兵のために胸を刺されて死にました。

同時に殺された張胤は、ひと月ほど前から自分の姓名を呼ぶ者があります。勿論その姿は見えませんが、声は透き通つたような強いひびきで、これも初めは遠く、後にはだんだんに近く、当日はわが面前にあるようにきこえましたが、役所へ出ると直ぐに討たれました。

楽人

建康けんこうに二人の楽人がくじんがありまして、日が暮れてから町へ出ますと、二人の僕しもべらしい男に逢あいました。

「陸判官りくはんがんがお招まねきです」

招まねかれるままに付ついてゆくと、大きい邸宅ていせきへ連れ込まれました。座敷ざしきの装飾さうじきや料理りょうりの献こ立だてなども大そう整ととのってしまして、来客きやくは十人あまり、みな善よく酒さけを飲のみました。楽人がくじんらは一生懸命いっせいけんめいに楽がくを奏そうしていると、もう酒さけには飽あきたから食たうことにすると言い出いしました。しかも自分おのれたちが飲のんだり食たったりするばかりで、楽人がくじんらにはなんにも宛あてがわらないのです。夜よがしらじらと明あける頃に、この宴うたげ会は果はてましたが、楽人がくじんらはもう疲つかれ切きって、門外かどの床とこの上うへにころがって正体まことなしに眠ねりました。眼めが醒さめると、二人は草くさのなかに寝ねているのでした。そばには大きい塚つかがありました。

土地とちの人に訊きくと、これは昔むかしから陸判官りくはんがんの塚つかと言いい伝えられているが、いつの時代じだいの人だかわからないということでした。

餅二枚

霍^{かくきゆう}丘^{ゆう}の令を勤めていた周^{しゅう}潔^{けつ}は、甲^{こう}辰^{しん}の年に役を罷^やめて淮^{わい}上^{しやう}を旅行していました。

その頃、ここらの地方は大饑饉^{ききん}で、往來の旅^{りよじん}人もなく、宿を飯^かるような家もありませんでした。高いところへ昇つて見渡すと、遠い村落に烟りのあがるのが見えたので、急いでそこへたずねて行くと、一軒の田舎^{いなかや}家が見いだされました。

門を叩くと、やや暫くして一人の娘が出て来ました。周は泊めてもらいたいと頼むと、娘は言いました。

「家^{うち}じゆうの者は饑饉に迫り、老人も子供もみな煩らつていますので、お気の毒ですがお客人をお通し申すことが出来ません。ただ中堂^{とどう}に一つの榻^とがありますから、それでよろしければお寝^{やす}みください」

周はそこへ入れてもらいますと、娘はその前に立つていました。やがて妹娘も出て来ましたが、姉のうしろに隠れていてその顔を見せませんでした。周は自分が携帯の食事をすませて、女たちにも餅二つをやりました。

二人の女はその餅を貰って、自分たちの室^{へや}へ帰りましたが、その後は人声もきこえず、物音もせず、家内が余りに森^{しん}閑^{かん}としていたので、周はなんだかぞつとしたような心持になりました。夜があけて、暇乞いをして出ようと思いましたが、いくら呼んでも返事をする者がありません。

いよいよ不思議に思つて、戸を壊^{くず}してはいつてみると、家内にはたくさんの死体が重なつていて、大抵はもう骸骨になりかかつていました。そのなかで、女の死体は死んでから十日^{とおか}を越えまいと思われました。妹の顔はもう骨になっていました。ゆうべの二枚の餅はめいめいの胸の上に乗せてありました。

周は後に、かれらの死体をみな埋葬してやったそうです。

鬼兄弟

軍將の陳^{ちん}守^{しゅ}規^きは何かの連^{まき}坐^ぞで信州へ流されて、その官舎に寓居することになりました。この官舎は昔から凶宅と呼ばれていましたが、陳が来ると直ぐに鬼物^{きぶつ}があらわれました。

鬼は昼間でも種々の奇怪な形を見せて変幻出没するのです。しかも陳は元來剛猛な人間であるのでちつとも驚かず、みずから弓矢や刀を執つて鬼と闘いました。それが暫く続いていくうちに、鬼は空ちゆうで語りました。

「わたしは鬼神であるから、人間と雑居するのを好まないものである。しかし君は堅固な人物であるから、兄分として交際したいと思うが、どうだな」

「よろしい」と、陳も承知しました。

その以来、陳と鬼とは兄弟分の交際を結ぶことになりました。何か吉凶のことがあれば、鬼がまず知らせてくれる。鬼が何か飲み食いの物を求めれば、陳があたえる。鬼の方から、も錢や品物をくれる。しかし長い間には、陳もその交際が面倒になって来ました。そこで、ある道士にたのんで、訴状をかいて上帝に捧げました。鬼の退去を出願したのです。

すると、その翌日、鬼は大きい声で呶鳴りました。

「おれはお前と兄弟分になつたのではないか。そのおれを何で上帝に訴えたのだ。男同士の義理仁義はそんなものではあるまい」

「そんな覚えはない」と、陳は言いました。

嘘をつけとばかりに、空中から陳の訴状を投げ付けて、鬼はまた罵りました。

「お前はおれの居どころがないと思っっているのだろうが、おれは今からしよくせん蜀川へ行く。
二度とこんな所へ来るものか」

鬼はそれぎりで跡を絶ったそうです。

青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社

1994（平成6）年4月20日第1刷発行

※校正には、1999（平成11）年11月5日3刷を使用しました。

入力：tatsuki

校正：小林繁雄

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

中国怪奇小説集

稽神録

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>